

# 寺内町の研究

36期生

## I テーマ設定の理由

時代の流れだろうか、使い捨て文化が象徴する様に、「古い物」に愛着を持つ人が減ってきたと思う。僕は「古い物」が好きである。昔から憧れていた。そこで思いついた事が「建造物」だった。幸い家からそれほど遠くない所に“寺内町”と呼ばれる一角があった。江戸時代の頃に形成された町並みである。そしてこの町特有の諸問題を知りたいという気持ちが強くなり“研究を始めよう！”と思ったのである。

## II 研究方法

### 〔1〕文献による調査

- (1) 寺内町の始まりについて ※ ここでいう寺内町とは富田林寺内町のこ
  - (2) 戦前までの寺内町の様子 とである。
    - ・幕府とのかかわりについて
    - ・産業面からの発展について
- (主として酒造業を取りあげる)

### 〔2〕実地調査

- (1) 寺内町の見学
  - ・書物で得た知識と実際との比較
  - ・立地条件について
  - ・その他
- (2) 保存上の問題について

## III 研究結果

### 〔1〕文献による調査から

- (1) 寺内町とは、中世の終り頃に浄土真宗本願寺派寺院を中心にして建設され発達した町をいう。このようにして形成された町は今では富田林と奈良県今井町を残すだけである。富田林寺内町は15世紀の中頃、蓮如、蓮教両上人が南河内地方の村々に仏教を広める為に毛人谷村に念仏道場をつくったことに始まる。そして1559年頃、蓮教上人の孫にあたる興正寺14世証秀上人が当時南河内地方を治めていた高屋城主安見美作守直政から富田の荒芝地を銭百貫文で買いとったと伝えられている。

興正寺14世証秀上人はその後、附近の四つの村から庄屋株2人ずつ計8人に、興正寺別院を中心とした寺内町の建設を依頼した。これが富田林寺内町の始まりである。

(2) 江戸時代になるまで興正寺別院を中心として発展してきた寺内町は町の周囲に濠を掘り土塁を廻らし、時間を決めて町に通じる四つの門を開閉させていた。そして元和元年(1615年)以降は幕府の直轄地として支配されることになった訳であるが、この頃から富田林は寺内町から人口約2,000人の在郷町として発展していく事になるのである。

在郷町とは地方の都市で農業等を基礎にして発達した商人や職人の町のことで、富田林は南河内の経済の中心地だった。そこで、ここで行われていた産業の分野をみると、

- 酒造業
- 河内木綿問屋
- 紺屋染物業

等がある。この中で酒造業は富田林特有のものであったことからこれを「産業面からの発展について」で取りあげることにした。

寛永21年(1644)七月、代官所に提出された「河州石川郡之内富田林家 数人数万改帳」には屋敷内に酒へやを所有する者が7人いたと書かれていた。いづれの人物も富裕で「上」と評価された家に住み下男や下女を雇っていた。この様な時期に酒造が開始されたのではないかという事が言われている。その後幕府は地域の酒造に阻止的な態度をみせる。その為、一時は終わりを思わせた酒造業だったが、1700年代になると又、酒造業の復活が始まった。幕府の統制緩和・酒造奨励の為であった。

寛政の改革において幕府は酒造業に対して厳しい統制を行った。この時に幕府は江戸用の酒を生産する国の指定を行った。指定された国は11国であった。

	樽	数
摂州伊丹酒	45000	58000
池田酒	8000	10200
大坂酒	17000	21700
伝法酒	10900	13600
尼崎酒	3200	4100
今津酒	16000	20200
西宮酒	28000	35900
灘酒	123000	156600
河州酒	600	800

11国の一つに指定された河内国とはいえ、その割合はとても少ないものであった。

左の表は摂津国と河内国の江戸積樽数の比較である(寛政4年)。

しかし当時の富田林酒造業の技水準は高かった。その頃一流酒屋であった大阪灘屋と比べてみても酒の醸法にみる水の使用では勝っており、原料に対して能率の良い量産をしていたことがうかがえる。

江戸積は富田林酒造業だけで間に合ったと言われていた事からもその繁栄ぶりがうかがわれる。「水勝れて善れば、酒造工業の家数の軒をならぶ」(河内名所図会)、「富田林の酒屋の井戸は、底に黄金の水がわく」(幕末期の俗謡)

## (2) 実地調査

### (1) 寺内町見学



#### <興正寺別院>

寺内町の中心寺院である。本堂には本尊阿彌陀仏と開山聖人像がある。写真の表門は元は桃山城のもので後に天満の興正寺に寄進されて、次にこの興正寺別院に移されたと伝えられている。非常に豪華で周りの町並みと調和して一層時代の重みを感じさせている。



#### <杉山家住宅> - 17世紀後半

元和元年(1615年)より酒造業を始め、戦前まで造り酒屋としてトップの地位にあり、最盛期には使用人のみで70人を数えた商家。明治時代、明星派の歌人として名声の高かった石上露子は本名が杉山孝子で杉山家の出身者だった。主屋の西方にある座敷と書院は大変豪華で全国的にも貴重な町屋の一つである。



#### <仲村家住宅> - 1782年

杉山家と並ぶ造り酒屋だった。寛政四年の江戸積11カ国の指定の時に、河内国の「江戸積酒造大行司」になったのは富田林村仲村徳兵衛であった。店の間と主屋とを別棟にして前後に配置する建築法は畿内では特に大きい作りである。歴史上有名な頼山陽や吉田松陰も富田林訪門の際、この仲村邸に滞在したと伝えられて

いる。寺内町の中でも特に重厚に見えた家の一つであった。

町は東西約四百m、南北約三百mで町の南から東にかけては石川が流れ、崖になっている。全体的に台地上にあるので防衛性に秀れている。富田林は地理的には、高野山へ向う為の東高野街道、堺からの平尾街道、千早方面への千早街道という三つの交差点の様な地点だったから集落ができる絶好の場所だった。町は六筋七町に正しく区切られている。そして寺内町が作られて以来一度も戦禍にまきこまれる事なく町全体は中世の状態が保たれているのである。

この町は曲がり角がやたらと多い。だから防衛面で秀れていて戦争時には町そのものが大きな砦となる。もう一つ驚いたのは下水溝が整っていたことであった。もちろん現在は水は通ってなく遺構として残っているだけであるが、かなり良い状態で保存されていた。

## (2) 保存上の問題について

保存に関しての運動が始まったのは比較的新しく昭和30年代頃からであった。しかし当時は、あまり関心も見られず、運動もあまり盛り上がりなかった。昭和48年1月に「富田林・寺内町を守る会」が結成された。この会の結成以後、富田林寺内町は新聞、雑誌、テレビ等で脚光を浴びることになった。

今年に入って富田林寺内町は一段と人々の関心を集めるようになった。富田林市が杉山家住宅を買いとり、それを一般に公開する等の事をした、又マスコミが報道をしたことも保存運動を後押ししたことになった。しかし、圧倒的な世論に対して旧家では一部を壊して駐車場を使ったり調和を考えない近代建築が出来たりしているのが現状である。又、個人の住宅の改造等を除いても問題は残されている。保存運動に乗りだしている地方自治体が配慮に欠けて景観を乱している場合もあるのである。歴史的町並みの保存は、その家屋だけでなく見事な景観の保存も欲しているのではないだろうか。保存運動を進める上で忘れてはいけないのは住民である。仮に「景観を著しく損なう増改築は認めない」という条例が成立したとする。そうすると住民が「光を十分に採り入れた都会的な生活をしたい」と願望しても近代建築物の建設は認められなくなってしまう。こうなってしまうと住民の自由な意志は認められなくなってしまう。結局、今の世の中では歴史的町並み保存は、その住民の良心に頼るしかないのだろうか。例として所有者自身によって行われる取壊し等の原因を挙げてみると、

1. 住みにくい。(生活用式の変化・プライバシーが守られない)
2. 設備化の限度。(夏には涼しいが冬には寒い・戸を開け放つと風と共に臭気や騒音も入ってくる)
3. 維持管理。(掃除等で人手が足りない・修理にかかる莫大な経費・家屋や庭や庭木等の管理ができない)
4. 暗い。(細長い敷地の為、部屋が暗くなってしまう)
5. 住居自体に封建制を感じていやがる。



道路上に「とまれ」の文字が見える。寺内町は他の地域に比べて人通りもあまりないのに、このような文字が多く見られる。



葛原邸(19世紀)の三階倉。電柱が真正面にあることで珍しい建物の姿が見られない。

## -考察-

実地調査をしていると確かに所々ではモータープールや新しい住宅が見られた。しかし全体的にみたらは特にひどい改築も見られず保存状態も良い方だった。旧家等では不便さを感じた取壊し、改築等をすることが今後もっと多くなるだろう。

それを解決する為には前ページの「所有者自身によって行われる取壊し等の原因」がどうしてもかかわってくる。まず「住みにくい」ということだが、原因の中で最も頭の痛い問題だ。座って生活する生活は今の生活用式とは全く異ったものだが、住民の方々は誇りを持って生活して欲しい。心持ち一つで変わるものではないかもしれないけれど、そうしなければ国民的財産は守っていけない。「設備化の限度」も同じ事がいえる。自然と共に生きるということも「趣があっている」(?)とか。「維持管理」は、少しプライバシーの保護に問題があるかもしれないけれど、地方自治体が個人に替わって掃除をすればいいのではないだろうか。又、問題があれば必要金額を補助すればいい。そうすれば経費の為に家を売ったり壊したりする場合は大幅に減る。「暗い」ということは今の生活の中で最も嫌われていることだが照明器具の改善等によってではなくすことができる問題だ。「住居自体に封建制を感じていやがる」という問題は僕が今後一番大きくなると予測したものだ。今の世代から「若い」世代が変わると、どうしても昔っぽい住居そのものが嫌になると思う。しかし何百年も隔ってきた住居を自分の代で跡絶えさせられるようになるまで嫌になるとは思えない。それに歴史的町並みの住居に住む人は、ほとんどが、その家の者で代々跡継ぎをとっているから、自分が子供の時から住む家を壊そうとすることも少ないかもしれない。五つの問題点の全てに関していえることは「誇り」である。そして歴史的町並みの住民達自身が積極的に保存運動を行わなければならない。そうしなければ我々は大切な国民的財産を一挙になくすることになってしまうのである。

#### Ⅳ 結 論

富田林寺内町という四百年の歴史を持つ町は簡単には壊れない。最近の「古い物」ブームは終わりを知らない様な広がりを見せているし寺内町住民の方々は度々勉強会を開いているし、自分達で町の歴史を守り育てようとして活動も行っているからだ。昔と今には大きな生活の差や習慣があるかもしれない。けれども“誇り”を持って住んでいていいと思う。和式の生活も又良いのではないだろうか？

今まで保存してきてくれた人々に敬意を払う意味で今後も「自分達が守ってやる」という決意を持って保存に力を尽くさなければならない。「どうなってもいい」という様な安易な考えが残っているならば町の歴史を自分達が止めてしまう事になるからだ。どうしても古い住居がいやならば外観をその状態にして内装を変えてもいい。気まぐれで伝統を壊していく事の方が物質的なものを壊すより、もっと危険な事だ。

#### Ⅴ 総 括

「使いすて」という言葉があるが、僕はあまり好きではない。又、それに限らず「古い物」を軽々しく扱う考え方も好きではない。今は昔に基づいてあるからだ。寺内町という題材は歴史的な部分が多いので自由研究等で調べると、どうしても書物に頼ることが多くなってしまった。しかし自分で考えるだけでなく、その歴史を知る程、逆に寺内町に興味を感じたと思う。今と昔について考えていると「保存問題」に最も興味をそそられた。昨年、今年と特に保存に関する話題が多かったからだ。それに今後問題になる確率が最も高いと思ったからだった。保存の問題点、特に“所有者”によって行われる問題についての自分の意見は「参考」に書いた通りだ。

地域ごとの保存運動が盛り上がり全国各地に埋もれている貴重な文化財や町並みが守られるのである。「素晴らしい歴史的文化財を永久に残せるよう出来る限りの努力をしてみよう」と思う。

反省としては、今回の研究で“産業面からの発展について”の所で最初は木綿・染物についても調べたかったのだが酒造業に関してだけしか調べられなかったという点が悔いの残ったことだった。

#### <参考文献>

○富田林の文化財

○近世河内酒造業の展開

—石川郡富田林村を中心として—

○環境文化 第31・32号

特集、歴史的町並みのすべて

1982 富田林市教育委員会

富田林市史研究紀要 第5号

福山 昭 富田林市役所

財団法人：環境文化研究所